

奈良県議会議長 山下 力 様

観光振興対策特別委員会
調 査 報 告 書

平成27年3月18日

観光振興対策特別委員会

目 次

I 調査事件	1
II 調査の経過	1
III 調査の結果	1
1 奈良県の取組状況	1
(1) 記紀・万葉プロジェクトの推進	2
(2) にぎわい交流の拠点整備の推進	2
2 県内の取組状況	4
(1) 大宮通り	4
(2) 平城宮跡歴史公園整備及び平城京歴史館(遣唐使船復原展示)	5
(3) 葛城市相撲館「けはや座」	5
(4) 飽波神社波・極楽寺(安堵町)	6
(5) 春日大社	7
(6) 記紀・万葉ゆかりの古墳群	7
3 県外の取組状況	9
(1) 八重垣神社	9
(2) 島根県議会	10
(3) 島根県立古代出雲歴史博物館	11
(4) 出雲大社	12
4 提言等	13
(1) 記紀・万葉プロジェクトの推進について	14
①観光キャンペーン	14
②市町村との連携	15
(2) にぎわい交流の拠点整備の推進について	16
①平城宮跡歴史公園整備	16
②県営プール跡地活用	17
③奈良公園周辺整備	17
④宿泊客の誘致	18
⑤外国人観光客の誘致	19
⑥若草山のにぎわい創出	20
5 おわりに	20
観光振興対策特別委員会調査経過	22
観光振興対策特別委員会名簿	24

I 調査事件

1 所管事項 歴史とにぎわい創出による観光振興に関すること

2 調査並びに審査事務

(1) 記紀・万葉プロジェクトに関すること

(2) にぎわい交流の拠点整備の推進に関すること

II 調査の経過

奈良県では、『古事記』完成1300年にあたる平成24（2012）年から『日本書紀』完成1300年の平成32（2020）年をつなぐ9年間にわたり、古事記、日本書紀、万葉集に代表される歴史素材を活用した観光施策「記紀・万葉プロジェクト」に取り組まれている。また、県営プール跡地に良質なホテルや周辺施設を一体的に整備し、奈良公園や平城宮跡とも連携した賑わいと交流の拠点づくりに取り組まれている。

本委員会は、平城遷都1300年祭に続く観光振興が、県土発展の必須であり、雇用創出、定住人口の増大、世界遺産をはじめとする歴史文化資源や豊かな自然資源の保存・活用を図るため、歴史とにぎわい創出による観光振興について調査することを目的として、平成25年7月5日に設置された。以来、14回にわたり委員会を開催し、関係部局からの説明を聴取するとともに、県内又は県外における取り組みなどの調査を行った。

III 調査の結果

1 奈良県の取組状況

奈良県では、県内にあふれるほどの観光素材があるが、本県の観光産業の振興に十分に結びついていない状況にある。県が積極的に、この豊富な観光素材を最大限活用し、一年を通してより多くの方に奈良に来ていただけるよう、「記紀・万葉プロジェクト」の取組、周遊型観光地としての魅力の向上、着地型旅行商品の造成、コンベンション誘致などの推進に取り組まれている。また、全国最下位レベルの宿泊能力の改善のため、良質なホテルの誘致に取り組むとともに、奈良公園や平城宮跡、県営プール跡地等を一体的に整備し、沿道の空間に賑わいを創出する「大宮通りプロジェクト」の取組を進めており、本委員会では下記の内容について調査を行った。

(1) 記紀・万葉プロジェクトの推進

「記紀・万葉プロジェクト」は、古事記完成1300年の平成24年から日本書紀完成1300年の平成32年までの9年間、記紀・万葉に代表される奈良県特有の歴史素材を活用した行政施策を効果的に展開し、新しい時代に奈良県の存在価値を内外に示すとともに、「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」を名実ともに実現していくための取り組みである。

このプロジェクトにより、「日本の原風景」を思い起こさせる本県ならではの存在感を内外に強くアピールするとして、平成22年2月、県庁内に部局横断的な連携組織「記紀・万葉プロジェクト検討委員会」を結成し、1年間にわたり検討を重ねた。また、その間、学識経験者や地元有識者に対する聞き取り調査を行い「記紀・万葉プロジェクト基本構想」を策定された。

<主な事業の内容>

- ・ 「記紀・万葉プロジェクト」推進事業では、古事記、日本書紀、万葉集や地域に伝わる伝承を活用した各種事業の展開の検討として、長期展開の計画の策定や現地で奈良の歴史を味わう仕組みづくりの検討などに取り組む。また、記紀・万葉ゆかりの地である三重県、和歌山県、島根県、宮崎県との連携を図る「記紀・万葉」シンポジウムを開催している。
- ・ 「記紀・万葉プロジェクト」広報PR事業では、首都圏・大都市圏のテレビ局、新聞社、出版社、旅行会社等への記紀・万葉プロジェクトに関する情報の発信、古事記の魅力を広く発信する「なら記紀・万葉名所図会」及び小学生等を対象とした親しみやすい「古事記かるた」を作成している。
- ・ 「なら記紀・万葉」シンボルイベント開催事業では、古事記朗唱大会、こども古事記かるた大会を開催し、島根県等と連携し、古代歴史文化に関する共同研究等を実施するとともに、古事記や古代歴史文化に関する優れた出版物の表彰と記念講演会等の開催などを行っている。また、ウェブサイト「記紀・万葉でたどる奈良」で紹介しているウォークルートのパネル展やこれまでの3年間の古事記を中心素材とした取り組みの集大成としての大古事記展を開催している。その他に、「記紀・万葉」をテーマに地元交通事業者と連携したイベント、「全国観光ボランティアガイド奈良記紀サミット」や奈良大学との共催による全国高校生歴史フォーラムなどを開催している。

(2) にぎわい交流の拠点整備の推進

「大宮通り」は、国道308号や県道奈良生駒線などからなる道路の通称で、第

二阪奈道路や阪奈道路を通じて、大阪方面から奈良公園へとつながる主要幹線道路である。沿道には平城宮跡や興福寺といった世界遺産をはじめとする多くの観光資源が点在している。

「大宮通りプロジェクト」は、奈良のメインストリートである大宮通りを、奈良に来たという期待感や満足感を抱いて頂くとともに、ゆっくり過ごしたい、再び訪問したいという想いを持って頂くことを目的とし、奈良公園、平城宮跡などの拠点整備による賑わいの創出と、拠点をつなぐ大宮通りに花壇を整備するなどの花と緑のもてなし空間の創出を図るものである。

<主な事業の内容>

- ・ 宿泊産業の育成支援において、県営プール跡地の賑わいづくり検討事業では、良質ホテルの誘致とホテルと相乗効果を発揮する集客力ある施設を整備し、奈良公園や平城宮跡とも連携した賑わいと交流の拠点とするための検討を行い、ならの宿泊力強化事業では、ホテルを核とする賑わいと交流の拠点整備等を推進するとともに、奈良の観光を滞在型観光に転換し、人々の交流を促進するため、ホテル事業計画提案競技募集を行い、ホテル事業を実施する民間事業者の選定手続きを進めている。
また、奈良の頑張るお宿応援事業、頑張るお宿に泊まる旅行造成事業、頑張るお宿に泊まる観光情報発信事業など、宿泊観光客の増加を図るため、宿泊事業者と連携・協働した取り組みを行っている。さらに、宿泊施設の創業、リニューアル、宿泊施設への事業転換等に対する制度融資の造成を行っている。
- ・ 移動環境の整備等において、奈良中心市街地の交通対策事業では、奈良公園から平城宮跡を含むエリアにおける交通環境の整備として、パークアンドバスライドの実施や、「ぐるっとバス」の運行を行うとともに、奈良公園交通対策事業では、奈良公園エリアの交通渋滞対策及び奈良公園の魅力向上に向けた施策として、登大路自動車駐車場のターミナル化に取り組んでいる。
- ・ 奈良公園において、奈良公園施設魅力向上事業では、奈良公園の抱える課題を解決し、「世界に誇れる公園」にしていくための奈良公園及びその周辺の整備として、県庁東から大仏殿交差点間の歩道整備、鹿苑の整備、吉城園周辺地区の整備、猿沢池周辺の散策路の整備などに取り組んでいる。また、新公会堂のコンベンション機能強化のため、シルクロード交流館との一体化に取り組むと共に、新公会堂庭園にライトアップ設備の設置及び奈良公園への観光客層で隙間となっている20代、30代の女性をターゲットにしたファッションショーの開催支援や広い年代・客層に人気のある食のイベントとして、あったかもんグランプリを開催している。
- ・ 景観整備において、奈良公園環境整備事業では、奈良公園内の植栽整備及び春日山原始林の保全に取り組むとともに、奈良の玄関口である大宮通りにおける植栽及び修景整備に取り組んでいる。
- ・ 外国人観光客の誘致において、外国人観光客のおもてなし環境の充実に向けて、(仮

称) 外国人観光客交流館の観光案内所、交流サロン、物品販売施設を先行して整備するとともに、外国人観光客誘致戦略新市場開拓キャンペーンの実施、Wi-Fi環境の整備や、多言語コールセンターの運営の対象範囲の拡大、観光ガイドブック・マップの多言語化に取り組んでいる。

- ・ 平城宮跡において、平城宮跡内イベント展開事業では、平城宮跡での賑わいを創出するため、春、夏、秋に天平行列、光と灯りのイベント、古代行事の再現などの魅力あるイベントを開催している。また、平城宮跡の利活用推進事業では、平城宮跡歴史公園の整備や平城宮跡を中心とした奈良エリアにおける歴史展示を展開している。

2 県内の取組状況

(1) 大宮通り

(調査目的：にぎわい交流の拠点整備について)

大宮通りプロジェクトに基づき、来訪者に奈良の魅力をアピールするため、奈良公園、県庁周辺、平城宮跡、県営プール跡地などを一体的に整備し、沿道の空間ににぎわいを創出するとして、近鉄奈良駅行基広場の環境改善のための大屋根の設置や奈良公園の玄関口となる大宮通りにおいて花と緑のおもてなし空間づくりが進められている。

【大宮通りプロジェクトの概要】

奈良公園、県庁周辺、平城宮跡、県営プール跡地など拠点整備によるにぎわいの創出とこれらの拠点をつなぐ大宮通りの統一した印象の空間づくりを目的とし、構成は、①奈良公園、②猿沢池周辺、③県庁周辺A（登大路ターミナル、県庁6Fレストラン）、④県営プール跡地、⑤平城宮跡、⑥大宮通り、⑦交通対策、⑧県庁周辺B（県立美術館、文化会館等）となっている。

【近鉄奈良駅行基広場への大屋根の設置】

奈良公園の玄関口となる近鉄奈良駅前行基広場を雨や直射日光の影響による劣悪な環境の改善を図るとして、平成25年5月30日から供用を開始している。

【大宮通りの修景】

交差点や街路樹間に地植え花壇を整備し、花と緑のもてなし空間の創出を図り、また、花壇の維持管理や街路樹等のあり方について沿道住民との対話を進めている。

(2) 平城宮跡歴史公園整備及び平城京歴史館（遣唐使船復原展示）

（調査目的：にぎわい交流の拠点整備について）

平城宮跡では、平成25年度、朱雀門の南側エリアの歴史公園拠点ゾーン整備計画を往事の姿を知ることで奈良時代を感じる空間づくりなどをコンセプトに策定し、平成26年度から整備に着手予定である。平城京歴史館では、日本の国づくりなどを映像や展示で紹介している。

【平城宮跡歴史公園拠点ゾーン整備計画】

平成20年に策定された「国営飛鳥・平城宮跡歴史公園平城宮跡区域基本計画」に基づく朱雀門の南側エリアの整備計画を策定。

整備コンセプトは、①往事の平城宮・平城京の姿を知り、奈良時代を今に感じる空間づくり、②来訪者が平城宮跡に期待感や余韻を感じ、楽しみながら快適に過ごせる施設配置。

整備スケジュールは、平成25年度整備計画を策定し、平成26年4月以降に整備着手予定である。

【平城京歴史館】

平城京歴史館は、日本の国づくりの歴史、それに伴う大陸や半島との交流、当時の平城京の様子や人々の暮らしなどを映像や展示で紹介されている。

平城京VRシアターの最新映像「平城京安らけし都」は、聖武天皇・光明皇后の皇女として生まれ、やがて女帝となることを運命づけられていた聡明な少女、阿部内親王の話。

展示概要

- ①タイムトンネル②古代のアジアと日本の歴史③激動の東アジア
- ④平城京のくらしと文化⑤東アジア史年表⑥遣唐使シアター⑦平城京VRシアター
- ・遣唐使船復原展示

(3) 葛城市相撲館「けはや座」

（調査目的：記紀・万葉ゆかりの地について）

平成2年に設置され、相撲の開祖である「當麻蹶速」を伝承するとともに、観光の拠点として地域の振興及び活性化を図ることを目的としている。実施事業の概要として、相撲関係資料の展示、及び各種イベントの実施、観光案内などが行われて

いる。

大和国當麻の地（現葛城市當麻）は、わが国最初の天覧相撲といわれる同地の當麻蹶速（たいまのけはや）と野見宿禰（のみのすくね）との相撲が行われたところと日本書紀に記載されている。當麻蹶速は、野見宿禰との相撲に敗れたが、地元では、當麻蹶速を偲んで五輪塔（けはや塚）や顕彰碑を建てるなど大切に守られている。

相撲館は、當麻蹶速の地元として建てられた相撲の資料館。資料は開館当初は相撲協会から借りていたが、所蔵資料寄贈や相撲協会から毎年協力してもらった資料により年々ふえてきている。本場所と同じサイズの土俵があり、相撲体験、相撲大会の開催や相撲甚句が披露されている。

葛城市は、相撲発祥の地とし、當麻寺や竹内街道などさまざまな歴史遺産、文化遺産が残っている。日本書紀に記載のある竹内街道や當麻寺を観光の最適なツールとして活用（関西ウオーカーへの竹内街道特集の掲載、相撲館で竹内街道1400年記念相撲大会を11月に開催、JR東海のコマーシャルに當麻寺など）している。

（４）飽波神社・極楽寺（安堵町）

（調査目的：記紀・万葉ゆかりの地について）

【飽波神社】

飽波神社は、聖徳太子の創始と伝えられている。祭神は、素戔鳴尊（すさのおのみこと）。

飽波神社は、安堵の総社で、聖徳太子が斑鳩から飛鳥に通った道といわれる太子道沿いにあり、雨乞い成就を祝って踊る「なもで踊り」の様子を描いた絵馬のほか、「なもで踊り」に使われた祭具や楽器などを所蔵している。

なもで踊りは、平成7年に約100年ぶりに復活し、毎年10月第4土曜日に奉納されている。

飽波神社内には、「太子腰掛け石」があり、聖徳太子が愛馬「黒駒」に乗り、「飛鳥の宮」から「斑鳩宮（現在の法隆寺）」の間を行き来されたおり、休まれた場所と云われている。このとき、太子をいやして舞い飛んだ雀の伝承により、雀は飽波神社の神の使いとされている。

【極楽寺】

聖徳太子により587年に開創されたと伝えられる真言宗寺院。本尊の阿弥陀如来座像は11世紀後半、藤原時代の作。像高139cmの半丈六仏で国の重要文化財に指定されている。本堂内には聖観音立像や奈良時代に書写され、現在まで伝えられる大般若経六百巻が残されている。通称「広島大仏」と呼ばれる、広島市にあ

った西蓮寺の阿弥陀如来座像（鎌倉時代）が安置されている。毎年5月には大般若経の転読会の行事があり、法要がおこなわれる

（5）春日大社

（調査目的：にぎわい交流の拠点整備について）

【第六十次式年造替への取組について】

「式年」とは「定まった一定の年限」、「造替」とは「社殿を造り替える」という意味であり、春日大社では、本殿の位置は変えずに建て替えまたは修復を行うため、「造替」という。なお、神の御座所を移すことを「遷宮」という。

春日大社は、奈良時代の創建以来、ほぼ20年に1度、御殿の建て替え等が繰り返され、今回は60回目の節目の造替となる。この造替によって、神威を次世代へ伝え引き継ぐとともに、その技術も伝承されることにもなる。

この造替の諸儀式にあわせて、観光客誘致という観点から、特別公開や行事への参加者募集などが行われる。

- ・御本殿特別参拝…H26年9月～。通常非公開・参入禁止であった東回廊外に設けられた御蓋山遙拝所が特別に参拝できる。
- ・木作始式、御慶之舞楽…前もって参列の希望者を募る。
- ・御神宝特別拝観…鹿島立御神影図、鹿島立鉾が拝観できる。
- ・国宝御本殿特別公開…仮殿遷座祭後、御本殿修理開始前の期間、特別拝観できる。
- ・お砂持ち行事…本殿前に敷き詰めている砂利を入れ替えを行う希望者を募る。
- ・春日若宮おん祭…平成26年が879回目、来年は記念となる880回目となる。

なお、春日大社や春日山原始林を含む「古都奈良の文化財」が平成10年12月にユネスコの世界遺産に登録されている。

（6）記紀・万葉ゆかりの古墳群

（調査目的：記紀・万葉ゆかりの地について）

【天理市の記紀・万葉ゆかりの概要について】

山辺の道は、日本最古の道といわれ、道沿いには記紀・万葉ゆかりの地がたくさんあり、天理市では、メディア向けに天理市の観光をアピールするため、特に記紀・万葉に的を絞った資料が作成されている。

天理市では、記紀・万葉ゆかりの地が数多くあり、日常の風景の中に歴史が息づいていることを実際に来ていただいて体感していただくため、県や近隣市町村と連携をとりながら、どのように魅力を発信していくかについて検討されている。

記紀・万葉のゆかりの地を、5つの切り口で表現している。

① 石上神宮

日本最古の神社の一つで、物部氏ゆかりの神社である。万葉集には恋の歌が記される一方で、大和王権の武器庫であったともいわれ、強さと柔らかさを併せ持っている。かつては本殿がなく、禁足地という場所に主祭神が埋斎され、崇拜対象となってきた。

② 歌 塚

天理市櫛本町は、柿本人麻呂生誕の地ともいわれており、人麻呂巡礼として、歌の題材となった地や遺髪を埋葬した歌塚等を紹介している。

③ 崇神天皇陵

多数の古墳が存在している珍しい景色を日常的に見ることができ、近隣市の古墳と併せて巡ることを紹介している。

④ 大和神社

神のツートップの天照大神と日本大国魂神のうち、日本大国魂神が鎮座している。春の初めの大きな祭りとして、ちゃんちゃん祭りなどの行事が行われている。

⑤ 氷室神社

古代には福住地区に氷室がたくさんあり、平城京時代には宮中に氷を献上されていた。氷は酒を冷やすために用いられたといわれる。

【記紀・万葉ゆかりの古墳群について】

① 西山古墳

前方後方形としては、全国でも最大の規模の古墳であり、墳丘は上段を前方後円形、下段を前方後方形に築く独特な形を持っている。古代豪族の物部氏に関係する者の墓と推定されている。

② 黒塚古墳

全長130メートルの前方後円墳で、周囲三方を池で囲まれている。平成9年度の発掘調査で石室が見つかり、33面の三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡1面が出土され、出土品を展示する展示館が設置されている。展示館には実物大の堅穴式石室、三角縁神獣鏡のレプリカが展示され、年間15千人～18千人が来館され

ており、他の同類博物館に比べて多い。

③ 大和古墳群

天理市南部の萱生町から中山町に所在し、3世紀後半から4世紀にかけて築かれた巨大な前方後円墳と前方後方墳が混在する最古級の古墳群で、その内、調査で内容が明らかになっているノムギ古墳、下池山古墳、中山大塚古墳の3基が平成26年10月6日に国史跡に指定された。

④ 赤土山古墳

天理市櫛本町に所在する全長約110メートルの前方後円墳である。後円部の先端に造り出しといわれる平坦部を築いているのが特徴で、平坦部（墳丘）には、円筒埴輪列が存在したほか、冢形埴輪、短甲形埴輪、盾形埴輪などが出土している。4世紀後半の古墳時代前期後半に築造された古墳で古代豪族和爾氏に關係する有力者の墓と推定されている。平成4年に国指定史跡となり、古墳周囲を巡れるように公園として整備されている。

3 県外の実組状況

(1) 八重垣神社

(調査目的：古代出雲と観光について)

【古代出雲との関係における八重垣神社の概要について】

八重垣神社は、近年、観光素材として注目度が上がっている。古事記の八岐大蛇の神話に出てくる素戔鳴尊（スサノオノミコト）と妻になる櫛稲田姫命（クシイナダヒメノミコト）が、御祭神として祀られている。縁結びの神様として知られる。

神社名の由来は、素戔鳴尊がヤマタノオロチから稲田姫命を助け、佐久佐女（さくさめ）の森に姫を隠し、森の廻りを八つの垣根で囲んだことから八重垣といわれている。

森には、姫がヤマタノオロチから身を隠す間、鏡の代わりに姿を映したと伝えられる「鏡の池」がある。この鏡の池では、水面に和紙を浮かべ、その上に硬貨を載せて、沈めると願いが叶うといわれており、良縁占いを行う参拝客で賑わっている。

なお、鏡の池から馬の人形が発掘され、水霊信仰の場所であり、神社ができる前から池は信仰の対象になっていたと考えられる。

ご神木は椿である。樹齢400年、根元が二股になっており、別々に生えた2本の椿が途中で1本になっている。これを連理の玉椿といい、神話の時代の一番最初

のものといわれている。

本殿板壁画は、元々社殿にあったものを外して保存している。年代測定の結果、13世紀中頃（鎌倉時代）のものと判明し、国の重要文化財の指定を受けている。

平成25年度の参拝客は、約50万人で平成23年度の約1.75倍に増加し、松江城に匹敵する観光客が訪れている。

(2) 島根県議会

(調査目的：島根県の観光振興について)

【「神々の国しまね」プロジェクトについて】

古事記編纂1300年、出雲大社「平成の大遷宮」を契機に県内各地の歴史・文化、自然等の観光資源を活用して、県・市町村・民間団体等が一体となって、島根の存在感を情報発信し、観光誘客の一層の拡大を図ることを目的として、平成22年度から平成25年度までの4年間にわたり取り組まれた。

事業コンセプトは、幅広い県民の参加を得た事業展開、事業終了後も地元で継続できる仕組みづくり、神話等にゆかりのある奈良県・三重県・鳥取県等との連携とし、プロジェクトの基本構想（5本の柱）は、①ふるさと再発見、②おもてなし、③イベント、④情報発信、⑤旅行商品づくりとされた。

事業成果として、島根県への関心が高まり、島根県のブランド力も高くなった。また、県民の意識がかなり高まった。出雲大社周辺では、10年前は観光客の滞在時間は1時間未満だったが、現在、平均3時間以上になった。神門通りの店舗も増えている。観光入込客数は、県全体で1,100万人増（対平成21年度比）となったなどがあげられた。

【「ご縁の国しまね」の取組について】

「神々の国しまね」プロジェクトが終わり、その後については、プロジェクトを通じ、ご縁、縁結びを願って出雲大社を訪れる女性が多かったこと、また、若い女性は情報の発信源になることから、若い女性をターゲットに平成25年度から「ご縁の国しまね」という新たな取り組みを始められた。

「ご縁の国しまね」は、全国から八百万の神様が次の年の縁結びの話し合いに集まる「ご縁の国」であることを認知してもらうことで、島根県の認知度を向上させ、継続的な誘客を図ることを目的としている。

メインターゲットは首都圏在住の20～40代女性、キャッチコピーは「運は一瞬、縁は一生。ご縁の国しまね」とし、PR大使にDAIGO氏を起用された。

事業展開は、プレス発表会、特設ホームページ開設、首都圏での地下鉄内広告、雑誌への掲載、ご縁カフェ、ご縁居酒屋のイベントの開催や、県内でのしまねっこ

のラッピング電車の運行、JR、空港での装飾を行っている。また、首都圏メディアへのプロモーションの実施、民間企業とのタイアップ、婚活イベントの開催などに取り組まれている。

【島根県の観光振興について】

平成20年3月に「しまね観光立県条例」が議員提案により制定され、観光を主要な産業として位置付ける。条例制定後は、観光関係予算は拡大し、組織が強化された。

神々の国しまねプロジェクトの成果を継承し、更なる発展を図るとともに、課題や市場の動きを踏まえた、中期的・総合的な観光施策を展開している。

今後の方向性は、①情報発信・イメージ戦略を展開し、島根県の更なる認知度向上を図る、②官民が連携した地域主体の観光地づくりの推進、③島根県の観光を担う人材の育成・基盤の強化、④伸びしろのある市場の開拓、もてなしによる地域力の向上等に取り組まれている。

市町村との連携において、地域の観光の主役は、市町村や観光業界であり、県は、地域の魅力づくりや観光を担う人材育成を支援し、県外への情報発信の積極的な展開に努めるとしている。

（3）島根県立古代出雲歴史博物館

（調査目的：古事記と出雲神話に係る歴史展示について）

【施設概要について】

【施設設置年】平成19年

【設置目的】島根の歴史・文化の調査・研究と成果の発信、歴史と文化を活かした人づくり、地域づくりへの貢献。

【開館】9：00～18：00（休館日：毎月第3火曜日）

【施設管理】指定管理制度を導入

【展示概要】

- ① テーマ別展示室（出雲大社と神々の国のまつり、青銅器と金色の大刀、出雲国風土記の世界）
- ② 総合展示室（島根の人々の生活と交流）
- ③ 神話回廊（神話シアター・神話展示）

博物館開設の発端は、昭和59年に荒神谷遺跡から大量の青銅器が出土したことにより、その活用を検討するため、平成元年に島根古代文化活用委員会が設置され、①古代文化研究センター（仮称）の設置 ②古代出雲展の開催 ③歴史系博物館の設置について提言された。そして、平成19年に古代出雲歴史博物館が開館された。

なお、博物館で神話に関する展示をするという提言はなかったが、前知事が、出雲といえば神話、神話の展示をやるべきということで、4つに分かれている展示室の一つが神話に関する展示となった。そして、CGを使って制作された映像を見るシアターも設置された。

事業費は整備関係総事業費120億円、管理運営費は平成26年度予算で3億5千9百万円（指定管理料2億6千9百万円含む）となっている。

入館者数は、開館当初の平年ベース見込みが20万人であるが、今年目標は25万人としている。（現実には30万人を見込んでいる。）平成24年度は神々の国しまねプロジェクト、平成25年度は出雲大社大遷宮の影響により、入館者数が倍増している。

平成26年度予算では、入館料収入を9千万円程度と見込まれているが、平成25年度の大遷宮で2億1千万円あったので、入館料収入の増が見込まれている。

館は指定管理者である共同企業体3者（地元電鉄、近畿日本ツーリスト、丹青社（全国的に博物館の運営、内装等を行っている））が、館の運営、施設管理、総合案内、イベント等を行っている。学芸部門と総務部門は県職員が行っており、指定管理者と県職員とが混在しているが、運営は順調とのこと。職員数は、全体で74名。

（県27名、指定管理47名）となっている。

館は教育委員会の施設であることから、学校教育との連携・交流に取り組むとともに、開かれた博物館づくりを目指し、ボランティア活動制度を採り入れている。

開館当初より、ボランティアが多くおり、常時10名程度が展示解説班、普及交流班、外国語通訳班の三班体制をとり、展示資料の説明やその通訳、普及交流事業の補助、環境美化など館の運営をサポートしている。地域の人に支えられながら館の運営を行っている。

出雲大社とともに出雲地域の中核となり、観光部門と連携しながら、県内外への情報発信を強化している。

なお、博物館周辺の町並みは、数年前までシャッター通りといわれていたが、最近新しい店舗が増え、人通りが多くなっているため、この流れをいかにして博物館に取り込んでいくかを課題ととらえている。

（４）出雲大社

（調査目的：古代出雲と遷宮について）

【古代出雲との関係における出雲大社の概要について】

出雲大社には、主祭神として大國主大神（オオクニヌシノオオカミ）が祀られており、縁結びの神様として広く知られる。

本殿は、大社造りと呼ばれ、1744年の造営以来、3度の修造（遷宮）が行わ

れ、平成20年から60年ぶりとなる「平成の大遷宮」に取り組まれている。本殿は平成25年度に修造が終わっているが、平成28年度までその他の修造が継続される。

社殿の建て替えの歴史として、古事記、日本書紀に第1回、第2回の記載がある。今の建物になる前に25回建て替えがあったといわれている。現在の本殿は約24mだが、かつては48mあったといわれている。境内から古墳時代の勾玉等が発見されたことから、古くから祭祀の場所だったと考えられている。

古事記では、大國主大神が、高天原に国譲りをする条件として、高天原まで届くような高く太い柱を持つ宮殿を建てて欲しいと示し、大國主大神を祀った宮殿が出雲大社の起源とされている。

平成12年からの発掘調査で、大きな柱を3本組みにしたものが発見され、千家国造家に代々伝わる図とほぼ一致している。

【出雲大社「平成の大遷宮」奉祝行事について】

- ・平成25年5月12日～6月9日 イベントの開催。神事ではなく、神事を記念して行われた。
- ・期間中に97イベントが開催され、実行委員会が交通対策として、駐車場整備やシャトルバスの運行などを行い、大きな交通渋滞等は発生しなかった。
- ・期間中の入り込み客数は、約752千人の参拝客が訪れ、イベント観覧者数は約133千人となった。

4 提言等

本委員会では、付議事件「歴史とにぎわい創出による観光振興に関すること」について、調査並びに審査事務である記紀・万葉プロジェクトにおいて、「観光キャンペーン」及び、「市町村との連携」、また、にぎわい交流の拠点整備の推進においては、「平城宮跡歴史公園整備」、「県営プール跡地活用」、「奈良公園周辺整備」、「宿泊客の誘致」、「外国人観光客の誘致」及び、「若草山のにぎわい創出」についての視点から調査検討してきた。

県の人口が年々減少している中で、観光振興は、地域活性化の有効な手段となるものであることから、記紀・万葉に代表される奈良県特有の歴史素材を活用するとともに、来訪者に奈良の魅力をアピールするため、奈良公園や平城宮跡、県営プール跡地を一体的に整備し、沿道の空間のにぎわいを創出するなど、本県が有する多くの魅力を最大限活用した歴史とにぎわい創出による観光振興に関することについて、次のとおりまとめ、提言を行う。

(1) 記紀・万葉プロジェクトの推進について

記紀・万葉プロジェクトは、『古事記』完成1300年にあたる平成24（2012）年から『日本書紀』完成1300年の平成32（2020）年をつなぐ9年間にわたる長期プロジェクトである。

『古事記』『日本書紀』が編纂され、数多くの万葉歌が詠まれた地・奈良県において、「記紀・万葉集」をはじめ連綿と受けつがれてきた様々な文献、地域の伝承などを含む奈良県特有の豊かな歴史素材を活用し、現代と古代、古代と未来、そして、一人ひとりが楽しみながら、歴史とのつながりを実感する「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の実現を目指して取り組まれており、奈良県のブランド戦略の大きな柱の一つに位置づけられている。

① 観光キャンペーン

古事記、日本書紀、万葉集、これらの書物を軸として、日本の心の原風景を思い起こさせる記紀・万葉プロジェクトは、『古事記』が完成して1300年、さらに『日本書紀』が完成して1300年と次々と訪れる1300年の節目を切り口に奈良らしい取り組みが展開される。よって、県内外の方に、記紀・万葉の取り組みをもっと身近に感じ、多くの人に触れていただくことが必要である。また、記紀・万葉を切り口に多くの観光客が奈良を訪れてくれるよう、県発行のなら記紀・万葉イベントガイドにより、県内各地で開催されるさまざまな記紀・万葉ゆかりのイベントのPRに取り組むとともに、奈良県には古代のロマンがあふれる魅力的な記紀・万葉ゆかりの地が点在しており、なら記紀・万葉名所図会などを最大限活用して、奈良県の記紀・万葉ゆかりの地のすばらしさを紹介する必要がある。

地元の県民に記紀・万葉プロジェクトの取り組みを知ってもらうために、さらにわかりやすく、触れる機会、体験する機会を創出するなど、県民の心に郷土愛が培われるよう、積極的に広報や事業を展開し、奈良の魅力を国内外に発信する必要がある。

これからの奈良の大きな神社の行事となる春日大社の式年造替に全国からもたくさんお参りに来られ、信仰面も一つの大きな観光の視点となるので、この機会に神社仏閣に対する信仰面や、それも含めた観光としての取り組みを進める必要がある。また、神社仏閣の中で、文化財の改修などに興味のある方は大変多いので、大きな改修事業などの情報を県が収集し、市町村や神社仏閣の関係者とも連携して、いかに観光客を誘致するかという観光の一環としての観点での誘客に向けたPR、特に

平城遷都1300年祭に多くの学生が神社仏閣を訪れたことから、首都圏などの大学の構内掲示板に広告を掲示するなど学生への誘客にも取り組む必要がある。

さらに、2020年、平成32年、東京都でオリンピック・パラリンピックが開催されるが、このオリンピック開催の2020年は、日本書紀完成1300年であるとともに、記紀・万葉プロジェクトの最終年でもある。全国的にオリンピックムードが盛り上がりを見せる中、本県としても好機と捉え、2020年に向けて、多くの方々に奈良県へ足を運んでいただけるよう、このプロジェクトを通して本県の存在価値を内外に大きくアピールするとともに、奈良県出身者による観光大使やふるさと大使などの人材を活用した観光PRを検討する必要がある。

② 市町村との連携

県中南和・東部地域は、県北部地域と比べて訪れる観光客は少なく、また、市、町や村にも歴史や伝統、文化があつて、それを引き継ぎながら現代に生かしていくことにそれぞれ努力をしている。こうした歴史を活用した観光振興を図るためには、市町村をはじめとした地元団体、県や地域にある歴史をしっかりと把握し、それを掘り起こし、磨きをかけていくとともに、県内の市町村にも多くの観光客が来るように、観光地までの公共交通への支援体制を充実し、さらに、市町村、地元団体が主体となり、地域の歴史を大切にす機運を盛り上げる必要がある。

橿原市にある耳成観光案内所も活用しながら、中南和・東部地域の魅力の効果的な発信に努め、記紀・万葉プロジェクトや、秘宝・秘仏特別開帳をはじめとした「巡る奈良」の推進など、本県の特色を生かした取り組みを県、市町村、民間団体がともに継続して実施し、中南和・東部地域の観光振興につなげるなど県において、市町村との記紀・万葉を含む観光振興についての連携強化に取り組む必要がある。

また、なら燈花会やなら瑠璃絵、若草山焼きなどの伝統行事や観光振興事業、文化財の修復・保全、歴史的建造物の再建、その他奈良公園の観光資源の価値を高める事業を対象とし、奈良公園及びその周辺地域の観光を振興することにより、当該地域及び奈良県の活性化を図ることを目的とする奈良公園観光地域活性化基金が創設されたが、県内市町村において多くの埋もれた文化財、国宝級のものでたくさんあつて、神社仏閣も観光に寄与できる、集客ができる場所の観光開発ができるよう、特定の場所に限定した基金ではなく、県全体を対象とした観光に寄与できる基金の創設を検討する必要がある。

(2) にぎわい交流の拠点整備の推進について

にぎわい交流の拠点整備の推進については、奈良のメインストリートである大宮通りの沿道に平城宮跡、興福寺や奈良公園といった世界遺産をはじめとする多くの観光資源が点在する中、奈良公園や平城宮跡などの拠点整備によるにぎわいの創出と、沿道に花壇を整備するなどの花と緑のもてなし空間の創出を目的とする大宮通りプロジェクトに取り組まれている。さらに、国営公園化され今後も整備が進む平城宮跡、また奈良公園やならまち、西ノ京等の観光拠点の中心にある県営プール跡地及び奈良警察署跡地において、良質ホテルの誘致と、県内外からの高速バスなどが発着するバスターミナル機能等を有する「賑わい」と「交流」の拠点を整備する構想が策定され、この構想に基づき、奈良公園や平城宮跡とも連携したホテルを核とする賑わいと交流の拠点整備や、県営プール跡地活用プロジェクトに取り組まれている。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、国際観光の振興、文化の発信、国際交流の促進、スポーツの振興、そして、にぎわいの拠点整備に重点的に取り組まれている。

① 平城宮跡歴史公園整備

平成22（2010）年に、平城京に都が移って1300年を迎えたことを記念して、平城遷都1300年祭を開催し、多くの方々が訪れた。その記念事業の中心となった平城宮跡は、現在、国において、国営平城宮跡歴史公園として整備のため、平成20年度に「国営飛鳥・平城宮跡歴史公園平城宮跡区域基本計画」が策定され、その基本理念『“奈良時代を今に感じる”空間の創出』の実現に向け、平成26年9月に国営平城宮跡歴史公園景観整備方針が策定された。

県では、「国営飛鳥・平城宮跡歴史公園平城宮跡区域基本計画」に基づく朱雀門の南側エリアの整備計画として、「平城宮跡歴史公園拠点ゾーン整備計画」を国とともに策定し、往事の平城宮・平城京の姿を知り、奈良時代を今に感じる空間づくりや、来訪者が平城宮跡に期待感や余韻を感じ、楽しみながら快適に過ごせる施設整備に取り組まれている。

この整備計画に基づく施設整備において、パークアンドバスライドの活用を検討するとともに、公共交通機関を利用しての来訪が困難な方、障害者や高齢者に配慮した駐車スペースを確保する必要がある。また、平城宮跡は広大であり、大極殿まで歩くと大変時間がかかるなど周遊するには相当の時間を要することから、何らかの移動手段について検討する必要がある。

さらに、平城宮跡は、本県の誇る歴史・文化資産であり、奈良観光の拠点となることから、国営公園の整備促進に向けて国に働きかける必要がある。

② 県営プール跡地活用

奈良市中心部に位置する県有地（県営プール跡地及び奈良警察署跡地）を利活用し、奈良での滞在型観光・人々の交流を促進する新たな拠点整備として、ホテルを核とした賑わいと交流の拠点整備事業に取り組んでいる。

この官民複合的に事業を展開するホテルを核とした賑わいと交流の拠点整備事業において、平成26年8月県有地（県営プール跡地及び奈良警察署跡地）を取得または借り受けてホテル事業を実施する民間事業者を公募型プロポーザル方式により募集し、2件の参加表明があった。

今後、ホテル誘致に伴う経済波及効果を見定めながら、跡地を最大限に有効利用できるように、また、高さ制限などの規制に関して奈良市と調整するなど、県民の理解を得ながらホテル誘致ができるよう取り組む必要がある。

また、県営プール跡地利活用が滞在型観光の新たな拠点として位置づけられていることから、跡地周辺整備において、観光客、または、利用者が利用しやすいような形となるよう、交通整備についても検討するとともに、景観も含めて決定したホテル事業者とすり合わせをしながら、ミスマッチのないような賑わいと交流の拠点整備に取り組む必要がある。

③ 奈良公園周辺整備

奈良公園は、奈良市街地に隣接し、世界遺産「古都奈良の文化財」である東大寺、興福寺や春日大社などの社寺と、春日山原始林と一体をなすものである。

奈良公園の持つ価値として、我が国でも有数の都市と自然が共生する場所であり、春日山原始林、奈良のシカなど9件の天然記念物を有するなど、豊かな自然環境を核として高密度に集積している。また、これまでの施設の整備、改良等により各所に公園の資源が集積するとともに、大きく育った松、桜等の植栽樹木が周辺施設と相まって、美しい風致景観を創出している。

奈良の観光は、奈良公園を中心に、文化財、神社、仏閣、歴史的景観などを観光資源にして発展してきている。そして、奈良公園のもつ自然資源、歴史・文化資源、公園資源、並びにこれら各資源が融合した独自の風致景観の魅力を守っていくことが非常に求められている。

県では、奈良公園基本戦略に基づき、近鉄奈良駅での電子案内板整備、大屋根の設置や、県庁東交差点から大仏殿交差点までの歩道整備を行うなど奈良公園周辺整備に取り組まれているが、(仮称)登大路ターミナルや歩道環境整備等においては、奈良公園の玄関口として、環境や風情に合ったものを整備するとともに、渋滞緩和のため、パークアンドバスライドの効果をさらに発揮させるよう、駐車場案内などの案内看板等を充実する必要がある。

また、近鉄奈良駅の地下改札フロアーから出口へは、南側に上りエスカレータ2台とエレベータ1台が設置されているだけで、下りのエスカレータが設置されていない。観光客の利便性やバリアフリーの観点から下りエスカレータの設置やエレベータの増設に向けて引き続き近畿日本鉄道と調整する必要がある。

さらに、奈良公園内の民有地の開発において、奈良公園の基本的コンセプトに合った奈良の観光にとってふさわしい景観となるよう地域活性化協議会を通じて、積極的に働きかけるなど、県と奈良市とが連携するなど、県と奈良市が一体とした形での観光行政に取り組む必要がある。

④ 宿泊客の誘致

県内には3つの世界遺産をはじめとする歴史文化や豊かな自然環境といった観光資源に恵まれており、本県の観光は、たいへん有望な産業であり、観光産業が活性化することで、宿泊業や飲食サービス業、さらに建設業や運輸業などの産業に波及することから、地域活性化の有効な手段である。

毎年、国内外から多くの観光客が訪れているが、その観光客を受け入れる宿泊施設数は不十分で、客室数は全国最下位となっており、奈良に来られる方々の宿泊需要に対応できていない状況にある。

平成25年奈良県宿泊統計調査では、1月から12月の県内延べ宿泊者数は約265万人で、前年比0.8%増と増加傾向にある。また、宿泊施設業態別延べ宿泊者数については、ホテルは増加傾向、旅館は減少傾向が続き、簡易宿所とキャンプ場については、B&B、ゲストハウス等の増加や低価格を求める近年の傾向から増加傾向にある。

県では、宿泊力を強化し、県経済の発展に資するため、宿泊施設の質、量ともに充実を目指して、既存宿泊施設の増・改築及び設備の設置や宿泊施設の創業・開業への支援など各種施策を実施しているが、各市町村の宿泊施設の整備に対してさらに支援するとともに、宿泊施設の基盤の充実に向けて取り組む必要がある。

また、宿泊につながる夜の魅力創出と朝の取り組みが必要であり、様々なプロモーション活動や旅行商品の造成など、宿泊型観光につながるような取組の強化が必

要である。

さらに、奈良県全体での宿泊客を増やすという点では、中南和・東部地域への宿泊客を増やさなければならない。そのためには、奈良公園の中で何年も開催されているイベントの中南和・東部地域での実施の検討や、地元県民が県内を宿泊観光できるような仕組みを、例えば、県内の人が宿泊したら割引があるとか、地域振興券などのいろいろな情報を流すといった視点での取組も検討する必要がある。

⑤ 外国人観光客の誘致

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を控え、外国人観光客はますます増加することが見込まれ、国においては、外国人観光客2,000万人の高みを目指しビジット・ジャパン事業を展開している。

外国人観光客の誘致において、外国人が日本に来るのは、自国で体験できない文化、芸術を体験、そして、景観を求めて来られる。例えば、和歌山県の場合、高野山に座禅を組むなどいろいろなお寺での修行を体験するため来られている。そのきっかけは、ル・モンド社の旅行ガイドで紹介をされたことがきっかけであった。このように外国の旅行ガイドの活用も検討する必要がある。

また、今後、外国人観光客誘致に向けて、奈良モデルとして、各市町村の地元のオリジナルの観光客を誘致できる機会の創出に取り組む必要がある。

留学生なら観光サポーター事業は、県内留学生を対象に、奈良の魅力を定期的に海外へ発信していただき奈良の知名度を向上してもらい外国人観光客のさらなる誘客にもつなげることを目的としているが、外国語による説明板の充実や、このサポーターとなる若い留学生に日本の独特の雰囲気、例えば習慣であるとか、マナーであるとか、日本ではこうなのだというようなことを母国語で知っていただける場とすることが必要である。

さらに、旧猿沢荘をリニューアルして設置される（仮称）外国人観光客交流館については、外国人観光客への観光案内機能を持ち、外国人同士、あるいは外国人と日本人との情報交換ができる交流施設とし、施設には宿泊機能を設けるが食事等の提供は行わないため、物販機能も設けるほか、日本の文化、あるいは奈良のいろいろな伝統行事・文化等も体験できるなど多様な対応ができるいわゆる外国人へのおもてなし機能をもった施設となる。この交流館では、物販に加えて軽い食事ができるスペースも設けて泊まれる方の利便性やゆっくりくつろげる施設となるよう検討する必要がある。

⑥ 若草山のにぎわい創出

若草山は、世界遺産である春日山原始林に隣接し、世界遺産の緩衝地帯（バッファゾーン）に指定されており、古来から和歌に詠われるなど、奈良公園におけるシンボルとなっている。また、自然資源、歴史文化資源、公園資源などから構成され、それらが融合した独特の風致景観を形成している。

また、若草山の入山者数は、昭和59年頃に約47万人のピークを向かえ、現在では約12万人にまで落ち込んでいる。若草山周辺では、山焼きなどのイベント開催、アクセス性向上のためのぐるっとバスの運行などに取り組まれているが、さらなる魅力の向上に向けて、これらの自然・歴史文化・公園の資源を守りながら、歴史と文化を活かしたにぎわいづくりについて検討する必要がある。

また、若草山の価値を改めて評価し、環境、景観や年中行事への影響を見定めるとともに、地元、観光業者など県民の声を十分に聞きながら、にぎわいづくりとしての地域活性化の観点からも検討する必要がある。

若草山移動支援施設については、本委員会において、「モノレールは美しい若草山の眺望を阻害すること。この地域一帯が世界文化遺産として登録された春日山原始林のバッファゾーンであって、史跡の値打ちを損ねる」という意見や、「知事は設置しない選択肢もあるとする柔軟な考え方であるとして議論を深めるべき」、「新しい奈良公園、あるいは若草山にふさわしいにぎわいづくりを考えるべき」などの意見が交わされた。

5 おわりに

本委員会に付託された事件は、県の政策課題である「経済の活性化」における「観光の振興」の中に位置づけられている。本委員会の設置目的である歴史とにぎわい創出による観光振興についてを「記紀・万葉プロジェクト」及び「にぎわい交流の拠点整備の推進」の視点から、県内・県外の事例調査を含む調査活動に取り組むなど、活発な調査を進めてきた。

県では、観光の振興において、意欲ある観光関連事業者とともに、観光産業の活性化やもてなし環境の充実を図り、奈良で宿泊する周遊型観光の推進、ターゲットを明確にし、奈良の魅力を効果的に発信するなど国内外からの観光客及びコンベンションの誘致の推進並びに、地域資源を活用した観光基盤の整備とにぎわいづくりの推進などの戦略を設け、その戦略に係る目標や取組などを明確にしながら、ポスト平城遷都1300年祭の観光振興を目指して取り組まれている。

また、来訪者に奈良の魅力をアピールするため、奈良公園を「世界に誇れる公園」と

するとともに、観光地としての平城宮跡の活用として、平城宮跡歴史公園の整備を促進し、特別史跡平城宮跡の一層の保存活用に取り組み、県営プール跡地を一体的に整備し、沿道の空間に、にぎわいを創出することを目的として大宮通りプロジェクトが、また、古事記、日本書紀、万葉集に代表される歴史素材を活用した記紀・万葉プロジェクトなど部局横断的な体制による推進が図られている。

以上により、本委員会の調査は終結するが、奈良に多くある歴史的、文化的観光資源を最大限活用し、周遊型観光地としての魅力を向上させることによるにぎわいづくりに努め、また、各市町村において、地域にある歴史や伝統、文化を活用した観光振興に取り組むことができるよう、記紀・万葉を含む観光振興にかかる連携の強化が強く求められている。今後とも、歴史的、文化的観光資源を活用するとともに、にぎわい創出による観光振興に一層取り組まれないことを要請し、本委員会の報告とする。